

学校法人 大阪滋慶学園

実践力と創造力ある医療人育成

学校法人大阪滋慶学園 浮舟 邦彦理事長

対 談

J R大阪鉄道病院 上田 祐二院長

「実学教育」「人間教育」「国際教育」の3つの理念を柱に、数多くの医療人を輩出してきた大阪滋慶学園グループ。時代の要請に応え、2011年には医療安全管理学を研究する日本初の大学院大学を開校し、リスクマネジメントのスペシャリストを養成してきた。地方が抱える人材不足の課題にも取り組み島根、鳥取、岡山に医療看護の専門学校を設立。医療の現場が高度化、複雑化、専門化していくなか、新たな職種の育成も視野に入れる。産学連携の強化をめざしながら超高齢化社会に向けてどんな医療人を育成していくのか。同学園グループの浮舟邦彦理事長とJR大阪鉄道病院の上田祐二院長が語り合った。

人間力と国際的感性養う

— JR大阪鉄道病院では、大阪滋慶学園の卒業生はどのような職種で活躍されていますか

上田 現在は看護師と理学療法士、言語聴覚士に卒業生がおり、医事課長も大阪滋慶学園出身です。いずれも人間味あふれる人たちはばかり。まじめに仕事に取り組み大変貴重な戦力になっています。

— 優秀な学生を育成されている大阪滋慶学園の教育方針は

浮舟 当校は開校以来、「職業人教育を通して社会に貢献する」というミッションの下、実学教育、人間教育、国際教育の3つの理念を掲げてきました。即戦力となる専門技術を身につけてもらうのはもちろん、医療人として必要な人間力、そして国際的な感性を養うことを教育方針としています。他国の価値観と文化を受け入れながら自分たちのアイデンティティーを確立することも大切。こうした考えに基づくカリキュラムを構成

し、社会に人材を送り出してきました。

— 人間教育に力を入れる理由と具体的な教育内容は

浮舟 国家試験に合格し業界のプロになるには知識と技術を身に付けることに加え、講義だけでは学べない「人間力」が必要。当学園の校内には、いたるところに「今日も笑顔で挨拶を」という標語が貼り出されていますが、これも人間教育の一環です。入学する前はきちんと挨拶ができなかった学生でも、卒業する時には毎日笑顔で挨拶ができるようになる。挨拶が習慣になって身につけているからです。国家試験に合格するのに必要な主体性も習慣の問題。まず、挨拶を習慣化するセルフマネジメント能力を養います。そして産学連携教育を通してチームマネジメントに必要なコミュニケーション力やリーダーシップ、フォローシップ、フェローシップを身につけていきます。そのためのキャリア教育委員会があり教職員による研究が進んでいま

うきふね・くにひこ 大阪滋慶学園理事長のほか、北海道から九州まで全国75校の専門学校や大学院大学、高校を運営する滋慶学園グループの総長。関西学院大学、米ウエストフロリダ大学など海外3大学から教育名誉博士号を授与されている。日本医療秘書学会代表理事。77歳。大阪府出身。



— JR大阪鉄道病院では医療現場でどのようなスキルや能力を求めますか。また多職種連携による「チーム医療」の取り組みは

上田 医師をはじめ看護師、セラピストから事務部門にいたるまで極めて専門性が高い職業なので、浮舟理事長がいわれた通り、入職時に各専門分野の基礎知識と基礎技術をしっかり身につけていることが最も重要。入職後は、向上心を忘れずに学習し続ける姿勢を求めています。肉体的あるいは精神的弱者である患者さんが相手の仕事ですから、コミュニケーション能力が重要であることはいまでもありません。日々の仕事を通じて思いやりのあるコミュニケーション能力を高めてほしいと考えています。

— 医師になって33年目ですね

上田 15年ほど前までは、ほとんどが医師主導の現場でした。「コメディカル（医療スタッフ）は後から勝手についてこい」という未成熟な状況でした。その後「チーム医療」が成熟、定着し、医療の質は極めて高くなった。大阪鉄道病院も「感染対策チーム」「緩和ケアチーム」「認知症対策チーム」「褥瘡対策チーム」など多くの医療チームが活躍しています。これらのチーム医療のリーダーは、医師よりもむしろ、認定看護師や薬剤師の場合が多く、多職種の専門性に起因する患者さんのための医療の質の向上のみならず、医師の負担軽減にも大いに貢献しています。また、国策として診療報酬でチーム医療の推進に誘導した厚生労働省の施策は極めて妥当だと思います。

医療人材の育成や医療機関の役割、グローバル化への対応など話題は尽きなかった



アジアからの留学生増加

— 大阪滋慶学園では社会人や高齢者の入学が増加。海外提携校の数も群を抜いています。国際教育を重視する理由は

浮舟 夜間の学科や資格によっては大学卒を条件にするコースもあるので、社会人の入学が増えています。大学から社会に出た後もキャリアを考え直したり、学び直したり、資格を取って仕事をしたいという動機で入学する人が増えてきています。

中国、台湾、香港、マレーシア、ベトナム、ネパールなどから留学生も増えています。中国の大学とは2001年から合併学科を開校し、中国の医療人を養成してきました。日本の国家資格を取得し、臨床工学技士や看護師として日本で働いている人も大勢います。病院にとっては医療ツーリズムの運営にもつながり、海外進出や海外の医療機関との提携の際に貴重な人材として重宝される。

— 訪日外国人が急増しています。医

療機関への影響は

上田 当院はJR天王寺駅前にあり、界隈は最近、外国人観光客でごった返していますが、不思議なことに外国人の受診は年に数えるほどです。ただ、東京五輪・パラリンピックを控えて増える訪日客に対する医療問題には、しっかり取り組んでいく必要があると思います。国の施策でも外国人診療の拠点病院を指定する動きがありますが、言語や未収金

など複雑な問題もある。本腰を入れて取り組むには覚悟と準備が必要です。また、親会社（JR西日本）がツーリズムを担う会社なので、医療ツーリズムへの参入を考慮する時が来るかもしれません。現在、外国人スタッフは在籍していませんが、浮舟理事長の話をお聞きして、多国籍人材の活用の必要性を再認識しました。

医療安全、感染対策に全力

— 医療現場では安全や質の向上が大きなテーマ。JR大阪鉄道病院ではどのようなマネジメントを行っていますか。

上田 医療安全と感染対策の2つは、病院の安心運営のための最重要事項。医療安全管理室と感染対策室を院長直属の組織とし、医療安全管理室は医療安全管理部長である医師と医療安全管理者である副看護部長のツートップ体制にしています。傘下に計20人の多職種スタッフで構成する医療安全管理対策委員会

を組織し毎月インシデント、アクシデント報告を解析。同時に、医療機能評価機構の医療事故防止事業部から定期的に送られる情報を共有しています。また、医療安全管理対策委員会での検討事項や決定事項を伝達するため、各部門各所にリスクマネージャーを配置し、連絡会議を毎月開催。「レベル3b」以上のアクシデントが発生したときには「医療事故原因検討会」を立ち上げて、原因究明や対応などに迅速にあたります。

